■安積中学校■安積高等学校在京同窓生

東京桑野会会報

●1996年4月1日発行●発行・編集人　澤田　悌●発行所　東京桑野会事務局　〒160 東京都新宿区新宿1-3-8 YKB新宿御苑804

No.18

（思索の森）　日下部正和 画

（安積健児の像）

ご挨拶

東京桑野会会長　澤田悌

①桑野の母校に学んだという共通の経験に結ばれた同窓の親睦の会であること

②会員はみんな仲良く相親しみ楽しい会であること

③何んらかの意味で会員の頼りになるような面もある会であること

会員の皆様に会報第18号をお届けいたします。1996年を迎え20世紀も残り少なくなりましたが、過去1年間を回顧いたしますと、所詮世紀末的現象というのでしょうか、世界的に事変が多発し、混迷と動揺が続きました。わが国においても、戦後50年という意義深い年であったが、年初の関西大震災に続いて、政治、行政、経済、 社会そして金融の各界に亘って予想外の事件が続き、 しかも景気情勢は依然として好転の足どりが鈍く、今年に入っても猶辛抱を要する状況が続いております。このような中で会員の皆さんも直接間接に影響を受けた方も少なくないのではと思いますが、東京桑野会は例年の通り別項記載の要領で年次総会を開催し、会員相互の親睦を一層深めると共に、この難局に対処するためにもお互に励まし合いたいと思う次第です。

会場はいつものように竹花則栄さん（55期）のお世話で椿山荘といたします。どうぞ各年次の会員の皆さん、多数ご出席下さいますようお待ちいたしております。

いつも思うことですが、遠く離れていても年1回東京において、あの母校の学舎、あの故郷の山や河そしてあの多くの人々を偲んで語り合い酒もくみ交わそうではありませんか。この楽しい機会に若い年次の諸君のご出席を特に歓迎いたします。

最後に各員皆さんのご健康をお祈りしてご挨拶といたします。

東京桑野会定期総会開催のお知らせ

東京桑野会のメインイベントである、定期総会と懇親会を開催いたします。多数の同窓会員の皆様が参加されますようにご案内申し上げます。

●期　日　1996年（平成8年）5月7日（火）
●時　間　午後5時――受付開始
　　午後6時――総会
　　午後6時30分――懇親会
●議　題　1．会務報告の件
　　2．予算決算の件
　　3．その他
●場　所　目白　椿山荘
　　東京都文京区関口2－10－8（TEL 03-3943-1101）
　　ＪＲ目白駅、地下鉄有楽町線江戸川橋駅下車
●会　費　懇親会費 8,000円（学生・年度会費含む 3,000円）
　　1996年度東京桑野会会費 2,000円

なお、当日出席出来ない方は、同封の振込用紙で年度会費 2,000円のお振込みをお願い申し上げます。

◇準備の都合もございますので、出欠の返事は同封の葉書で4月15日迄にご返送下さいますようお願い申し上げます。

◇また、連絡もれもあるかと思われますので、先輩、同期、後輩もお誘い合わせのうえ、多数の出席をお願いいたします。

◇昨年度は、1995年4月25日に開催され、170名を越える参加者があり盛況でした。

母校便り

★よみがえった白亜の御殿―旧本館修築終わる

旧本館の化粧直しが7月末に終了しました。これは、外部塗装の劣化が進み、下地が露出しているところが多くみられるようになったので、建設全体への影響を早く防止するために行われたもので、総工費は 2,783万円。

★念願の家庭科室ついに完成―様々な実習用設備整う

あれ？　と思われる方も多いと思いますが、文部省の指導により家庭科が男女必修になったことに伴い、図書館の東に建設が進められていたそうです。平成6年度より家庭科の授業が行われており、水野徳子先生が赴任なされています。

★イギリスの精神に学ぶ―第2回安積海外派遣事業

昨年度より行われている安積高校海外派遣事業は、今回アメリカに変わりイギリスを派遣先として、7月21日から30日までの10日間行われました。ロンドン見学を主体とし、オックスフォードではマートンカレッジ等を見学したそうです。

★野球部

13年ぶりに春季県中大会で優勝をとげましたが、県南大会では健闘およばず1回戦で湯本高校に敗退しました。

★陸上部

柳田君が、砲丸投げで県新記録、東北新記録となる記録をマークしインターハイ全国大会出場を果たしました。全国大会でも4位に入賞しました。

★ソフトテニス部

個人戦で全国大会出場

以上輝かしい成果がありましたが、全体的に見て、今回のインターハイは

人が、季節が、集います。

味
お食事
伝統の味に季節の彩りそえて
●料亭・錦水
●松阪牛和風料理・離れ家
●レストラン・カメリア

宴
ご宴会
華やかな集いに17の大小宴会場
●2、500名様までのパーティ、国際会議、ファッションショーなどのお集まりに。
●最新機能の音響装置。

寿
ご婚礼
佳き日に永遠の幸せを誓う
●800名様までのＨ本料理、フランス料理、着席ご披露宴。
●庭園での記念写真も随時お撮りいただけます。
●チャペルでのご挙式も承ります。

FUJITA KANKO
CHINZAN-SO
椿山荘
東京都文京区関口2-10-8
☎03-3943-1101

例年より、すこし思わしくない結果だった様です。

★吹奏楽部

県吹奏楽コンクール金賞

★合唱部

全日本合唱コンクール東北大会銀賞

★放送委員会

全国高校放送コンテスト　ラジオ番組ドラマ部門優良賞

会員動向

☆本田　安次氏（36期、文学博士、元早稲田大学教授）は、平成7年度の文化功労者に選ばれ、顕彰式が11月6日に東京霞が関の国立教育会館で行われました。本田氏は民俗芸能一すじに研究をつづけられ、多くの著書を発表されるとともに、芸術選奨文部大臣賞、柳田国男賞を受賞されています。

☆小浜　精吾氏（58期、カバヤ工業協同組合理事）は、平成7年5月、黄綬褒章を受賞され、6月1日に椿山荘にて有志によるお祝いの会が開かれました。

☆湯浅　譲二氏（62期、作曲家）は、平成7年10月に「ピアノ・コンチェルティーノ」と交響曲「奥の細道」に対して、第10回京都音楽賞の大賞を受賞されました。

☆古川　清氏（63期、前アイルランド大使）は、平成7年9月に、外務省から宮内庁へ移られ、東宮職東宮侍従長、東宮大夫になられました。

☆宗像　紀夫氏（73期、前東京地検特捜部長）は、平成7年8月に、あの大津事件で有名な大津地検検事正となられ赴任されました。

☆竹花　則栄氏（55期）は、椿山荘渉外支配人として東京桑野会の総会開催や各年次の同窓会の会場確保など、永年ににわたりご尽力頂きましたが、平成7年春退職されました。6月1日に幹事、有志が集まり感謝の慰労会が開かれました。

車元氏による講演会

東京桑野会　平成7年度幹事会

平成7年11月17日（金）夕刻、椿山荘にて東京桑野会幹事会が開かれ（約40名の出席）、会務・会報の編集方針等について話し合いが行われました。

通常はその後直ぐに懇親会に入るのですが、今回から新たな試みとして、講演会を開き、各分野の専門家によるお話を聞いてはとの意見があり、第1回目の企画として、車元氏（52期）に講師をお願いしました。

車氏は、韓国から日本に帰化後（当時高瀬弁護士が支援された）、医師として栃木県の地域医療に尽くされており、一方で日本の古代史の研究をライフワークとされております。

今回は「日本上古史について」講演を頂きました。古代朝鮮と日本の関係、さらに言語学的観点を踏まえ、陰陽五行等の解説をされながら、非常に楽しい古代史の話を聞くことができました。

各自に配られた膨大な資料に戸惑う幹事も見られましたが、かなり専門的な解説にも係わらず、熱心な質問も多数あり、暫く神秘の古代史について考える時を持ちました。

仲介の労をとって頂いた吉田弘俊顧問をはじめ、52期の同期の人々も多数参加され、普段と違う大変有意義な幹事会になったことを報告します。

今後、年1～2回の幹事会をできるだけオープンにしながら、勉強会を兼ねた楽しいものにしようと企画する予定です。講師として自薦他薦結構ですので、事務局まで、ご一報下さい。

（広報部長　櫻井淳　78期）

講演中の車元氏

懇親会で談笑する
車元氏、高瀬氏等

営業品目
■煙突・公害防止関連機器
■貯槽・塔槽類
■鋼構造物

上記品の
●設計・施工監理
●点検・調査・診断
●製作・建設

株式会社　富士ハイエンジニヤーズ
一級建築士事務所
〒105 東京都港区新橋4丁目21番7号
つるや加藤ビル
TEL (03)3434-1611（代表）
代表取締役　遠藤　修（67期）

ごあいさつ

安積桑野会会長　**渡辺信雄**

東京桑野会会報第18号発行誠に慶賀にたえません。心から会の発展を御祝い申し上げます。私は毎回御地へ参りまして安高の現況を御知らせし在京の同窓生の皆さんに少しでも昔をしのんで戴くべく楽しみに出させて戴き感謝にたえません。創立百十周年も皆様の御協力により盛大に挙行出来まして早や二年経過致しました。その時の記念事業として生徒の海外研修という奨学事業も順調に実施致しております。1994．7．26～8．4アメリカ北東部研修。1995．7．21～7．30イギリス研修。と2ヶ年有意義な研修を続けられました。誠に当を得た事業であり、生徒達には国際感覚を体得し得た機会を充分にかみしめ将来にはづみをつけられたものと覚信しております。今後もあと数回実施出来る事業となることを思いますと諸先輩に対し心から厚く御礼を申し上げます。各地の同窓生の皆様に色々と近況等を御知らせ致し往年の安中、安高の質実剛健、文武両道、開拓精神を伝統として継続してゆかれること心から念願いたすものであります。東京桑野会の皆様には常に同窓生の連帯感を強められ地域には夫々の御事業、職業を通して安中、安高時代をふりかえり一層の親近感をもって協力し会いる方々ばかりで最大同窓会としての影響は大なるものがあります。今後も折りにふれ郡山のまちまち安高の変らぬ旧本館等々に足をはこばれられんことをお待ちしております。時節がら会員の御壮健と御事業のいやさかを祈念し、ごあいさつと致します。

安積の近況について

学校長　**渡邊專一**

東京桑野会の皆様には日頃よりご支援、ご協力いただき厚くお礼申し上げます。

さて皆様と共に誇りとしております旧本館は関係の皆様のお骨折りにより全面塗装となり白亜の殿堂に生まれ変わりました。

一方、本校北校舎も今年大規模改修工事の対象となり、旧本館と同色で仕上がりました。

正門を入って見たこれらの佇まいは歴史の重みを一段と感じさせ学問の府にふさわしい雰囲気をかもし出しております。

これを期に朝河桜と新城松の案内板も新しく設置しました。

九月にはプールの改修工事があり、プールサイドとフェンスの白が松の緑とともに水面に写って映えております。

桜桑会のご協力により運動部関係の備品の設置、グランドの照明が増設されました。

昨年は本県において第五十回国体が開催されました。本校生徒が、水泳、ソフトボール、ソフトテニス、ラグビーに、職員がソフトテニス、サッカーにそれぞれ選手として出場し、上位入賞を果たす活躍をいたしました。その他、役員、補助員あるいは開・閉会式の合唱、合奏隊として協力いたしました。

お陰様で県民あげての国体は大成功のうちに幕を閉じることができ、総合優勝という栄冠もえられました、県民の一人として誇りに思っているところであります。

その国体開催中の十月十七日、新装なった旧本館に高円宮両殿下がご訪問になられました。

佐藤県知事、山口県会議長、今泉安歴博館長、滝田安歴博理事長、渡辺同窓会長と私が生徒代表と共にお迎えいたしました。

合唱と校歌で歓迎し、旧本館の視察の後“紫の旗ゆくところ”そして両殿下へのエールを送ってお送りするというスケジュールはお二人にとっても心に残るご訪問であったものと推察しております。

私は四月着任以来、生徒の進路希望力を入れると共に、学習、部活動の為の環境の整備・充実に意を注いでまいりました。

困難に奮然と立ち向かい己の人生を切り開こうとする「開拓者精神」を養い、二十一世紀を任せることのできる心身共に健全な若者の育成に努力をする覚悟であります。

今後とも皆様方のご支援とご指導をお願いいたします。

東京桑野会の皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げごあいさつといたします。

日下部正和 画

公認会計士　星 武典 事務所

ムアーズ・ローランド国際会計事務所所属

〒101東京都千代田区神田錦町2丁目5番地(KSビル3F)
TEL(03)3291-8361　FAX(03)3291-8465

星　武典(58期)

「安積四九会」のあゆみ

小谷　寛（49期）

「安積四九会」のあゆみ

「安積四九会」は49期同期生親睦会の愛称である。私共は旧制安積中学に昭和７年入学し、昭和12年卒業した。経済不況の長く続いた時代で、入学定員も従来 200名を50名削られた。小学６年の時に満州事変、昭和12年日中事変、昭和16年12月太平洋戦争へと進展し私共全員が戦争を体験し、この犠牲者は20名を数える。その後病気による物故者が大部分であり最近の在籍数は65名で入学当時の43％になってしまった。

私共は戦争をはさんで、戦前、戦中、戦後を経験し、今日の隆盛を見たことに深い感慨を覚える。

「安積四九会」会員は居住地区別に分けて、郡山地区40名、仙台地区８名、東京地区17名に区分され、各地区毎に親睦の会を続けている。各地区合同会合は昭和44年になって、郡山地区が幹事として動き、郡山市内で行ったのが最初である。その後地区別に幹事を交替し実施することになり現在に至っている。そのあゆみを簡単にまとめると人数は参加者数。「郡山」「仙台」「東京」と会合幹事担当を略記。当初の会合で中心になって活躍された方は、既に他界された方が多く故人の偉業が偲ばれる。

１、昭和44年10月、郡山、36名、郡山市松林　２、昭和55年２月、郡山、36名、磐悌熱海一力、奥磐悌観光、３、昭和57年６月、仙台、32名、宮城県秋保ニュー水戸屋、４、昭和58年３月、東京、30名、日立電線ひぬま保養所、水戸観梅他、５、昭和59年９月、郡山、46名、磐悌熱海一力、創立 100周年前夜祭、６、昭和60年９月、仙台、32名、宮城県昨並、ニッカウイスキー見学、７、昭和61年９月、東京、30名、鬼怒川星のや、鬼怒川下り観光、８、昭和62年９月、33名、会津東山東鳳、50周年記念観光、９、昭和63年９月、仙台、32名、宮城県白石小原、10、平成１年９月、東京、32名、新那須湯本グランドホテル愛寿、白河観光、11、平成２年９月、郡山、30名、磐悌熱海華の湯、12、平成３年９月、仙台、26名、宮城県青根湯本不忘閣、13、平成４年９月、東京、会員20名、夫人５名、未亡人４名、計29名、椿山荘（昼間）、14、平成５年９月、郡山、30名、岳松渓苑、15、平成６年９月、仙台、29名、宮城県白石小原、安積 110周年前夜祭、16、平成７年10月、東京、27名、新野地相模屋、

今後のあゆみを考える

平成７年10月の新野地温泉会合は、東京地区幹事担当で行ったが、参加者27名（参加率42％）に留まったが、充実した会合が実施出来た様に思う。最近１年間で、仙台１名、郡山１名、東京１名、合計３名の物故者があり、会合初めに追悼の時を設けた。会合欠席者の大部分は体調不良を理由としており、夫人病気理由の３名を加え50％を占めている。今後のあゆみに関して、話し合う機会を持ったことは大きな収穫であり、主だった意見をまとめてみた。

○　会合案内通知を全員に対して画一的に行うことは適切でなく、地区会員の情報に関しては地区幹事が確実につかんでいるだけに、通知方法の簡素化が可能である。

○　無駄な経費を省く意味から、「会員名簿」「歌集」は必要なく、「紫の旗」掲揚の議式は除いてもよい。健康管理上暴飲暴食は考えられず、カラオケは大部分の人が無関係の様だ。「記念写真」も不要との意見も出た。要約して私共の会合は懇談する事が最大の目的であり願いである。尚各地区合同の会合を「総会」と呼称しているが、此処では単に「会合」としてまとめさせていただいた。

○　今後の会合は会員数その他の点で、郡山地区が簡素化の方向で企画する事が適切の様だ。本命はこの会合を出来るだけ長く続ける事であり、それを心から望んで止まない。

超常現象と科学

渡邊忠雄（51期）

幽霊・透視・霊感等の超常現象は、非科学的で取るに足りない迷信だと一般には思れている。

ところで科学とは、広辞苑によると、「世界の一部分を対象領域とする経験的に論証できる系統的な合理的認識」とある。そして普通物理学、化学、生物学等は科学的なものの代表と考えられているのではないだろうか。これら学問は、原理・法則等を出発点とする論理の積み重ねにより、まことに見事な結論を導き出し、私どもを納得させる力を持っている。然しながら出発点となる原理・法則等について、どのようにしてそのような認識が生まれたのかということになると、万人にその認識が可能であったとは思われない。天才の直観に基づく仮説が、これを出発点とする論理的思考過程を経た経験データの統計処理によって立証されて、始めて原理・法則と認められるのであろう。科学には、このように直観に基づく仮説を立てるという極めて重要な過程が存在する。

Kinden CORPORATION 電気設備

株式会社 きんでん

東北支社　〒980 宮城県仙台市青葉区中央4-6-1 住友生命仙台中央ビル6階
TEL.022-227-1265 FAX.022-224-8071
福島営業所　〒963 福島県郡山市清水台1-6-2 山相郡山ビル2階
TEL.0249-23-5193 FAX.0249-23-5177

東北支社顧問　土屋七郎（57期 東京桑野会副会長）　東北支社長　増田輝雄

超常現象と称するものは、誰にでも経験されるといった認識ではなく、極く一部の特種な能力を持った人々にしか経験されない認識のようである。つまり超常的認識は、天才的直観とか芸術家の感性のようなものなのではないだろうか。

科学的に認識していると思っているものも、実は一般凡人にとっては、原理・法則またはそれから導かれた結論を伝えられ、教えられて鵜呑みにし、科学的だと思っているに過ぎないのかもしれない。一般相対性理論から導かれた結論は、私どもにとっては理解し難い奇妙なもので、超常的現象とさえ言えそうである。然しこれも科学的結論なのだから間違いないものだと思っている。人間の認識というものは、先々の分野の優れた才能によって切り開かれ、その範囲を拡げてきた。

こう考えると超常的現象を統計的方法その他科学的方法を用いて研究することは意味がある。頭から非科学的と否定するのではなく、一応科学研究の対象としてその存否を検証し、結論を出すべきではないだろうか。ただ困るのは、所詮霊能者と称する者の中に、怪しいのが結構いるらしいことである。これの真贋を見分ける方法も、科学的検証過程で一緒に開発される筈であり、その問題も解決しよう。

アメリカ・ソビエットの軍部・諜報機関などで、この現象が眞剣に研究されたことがあるそうだが、その結論がどんなものであったのか興味深いところである。

（株式会社渡辺組社長）

日本に帰ってみると

古川　清（63期）

長年に亘った出稼ぎ生活も終り漸く日本に腰を落着けることになった。矢張り住むのは日本である。うなぎでもラーメンでも大好物が何時でも食べられる。併し最後の任地が住み易いアイルランドであった故か、若干気になる点もある。それは「生活のゆとり」というものでアイルランド人の方が、ＧＮＰも低いのに何となくゆったりとした生活をしている様に思えたからである。住宅の間取りも広いし、夏の休暇シーズンには家族揃ってフランスとかスペインとかに出掛けてしまうし、大黒柱が亡くなっても相続が大変と言う話も聞かないからである。ゴルフをしても、一流レストランで食事をしても「痛い！」という請求書は来ないので友達を呼び合う社交はスムーズに行なわれる。

国際化が進展すれば当然この落差は問題になってくる筈であり、昨今のいわゆる価格破壊はその一環なのだと思う。でもそのプロセスの中で日本の良さが破壊されては困る。欧州で一番安全と言われるダブリンでさえワイフは引ったくりに会って転倒し頭などに負傷した。車のラジオなどが良く盗まれるので、サイレンの様な音が鳴り出すアラーム装置を高い金を払ってつけるのは常識になっているし、赤信号で一時停止した時ドアを開けて財布の入った上衣やハンドバックなどをひったくる子供の泥棒が横行しているので、乗ったらドアをロックしておくのもコモンセンスである（それでもハンマーでガラスを叩き割って盗む奴がいる）。又店でもレストランでも日本では言葉が丁寧で、礼儀正しく愛想が良いのもいい。「いじめ」事件を聞くと心が傷むが、日本が真のゆとりのある住み易い国になって欲しいと思う。横たわる問題は澤山あるが皆解決出来ない問題ではない。私も長生きをしてその時を見たいものである。

（宮内庁東宮職　東宮大夫）

北欧のクリスマスとお墓参り

水口　禎（67期）

「人」も「建築」も「都市」も30歳が加齢されたらどんなになるだろう。還暦・定年退職を機会にかつてお世話になった北欧の地を旅して来ました。ささやかな準備にワープロに向かえばラジオからシューベルトの「冬の旅」が流れ、旅を急かせる。

オランダ・オーストリアを経てドイツのリューベックから２日間の船旅でフィンランドに到着。ヘルシンキへのアプローチは海からがベストと勝手に決め、恐らく結氷したバルト海を砕氷船よろしくバリバリと砕きながら進む（30年前はそうだった）と思いきや、若干期待外れの感。

久方ぶりに会う街との出会いは、過大な期待とその反動による若干の失望感と複雑な感慨。でも地図なしで歩ける数少ない街だという密かな快感を味わう。ホテルの窓からは30年前に実施設計に参加した駅前の建築が見え、自分だけで勝手に感激する。

12月初旬からの北ヨーロッパはクリスマス一色、各戸の窓には照明の飾りが美しさを競い合い、街は買い物の人々で賑わい、ＴＶからはクリスマス

鞍手茶屋　東京で福島のけんちんともちを!!
――昼はそば、夜は酒と肴――
霞ヶ関店　〒100　東京都千代田区霞ヶ関3-2-5　霞ヶ関ビル1F　電話　03-3581-7066
大手町店　〒100　東京都千代田区大手町1-1-3　大手センタービルB1　電話　03-3213-2385
中山峠店　〒963-13　福島県郡山市熱海町国道49号線中山峠　電話　0249-84-3774
〈店主〉上野富衛（78期）

ソング。ヨーロッパでのクリスマスの大きさに改めて驚く。ヘルシンキ到着の23日はまさにクリスマス直前。会うべき人には旅の出発日に一方的に連絡はしたもののどうなることやら心配に。果して到着後に電話をしたらそれぞれ家族でクリスマスを過ごすとのこと。27日と28日に会う約束をする。

その間は一人で予定した建築を訪ねることにしよう。ところがかつての事務所のボスの未亡人（彼女も建築家）からヘルシンキの建築案内資料がその夜、宿に届けられる、素晴らしいクリスマスプレゼントに大感激。

12月25日の街は全く動きが止まる。静寂そのもの、日本の元旦よりも。商店は当然閉じ、通りには人っ子一人歩いていない。公の交通機関もグッと少なく、信号機も間引いて作動されているようだ。

街の住人はどうしているのだろう。「家族ぐるみ」「家族だけで」クリスマスを過ごしているという。ということは、家族の無い人、一人暮らしの老人や外国人などはどうしているのだろうと、そういう人達に思いを馳せる。朝かつて住んでいた通りを訪ねる。酷寒のクリスマスの日、孤独（？）な老人が一人公園のゴミ箱を覗く姿を見る。現在の自分の状況と比べ胸が痛む。

＊＊＊＊＊

同じ事務所で製図板を並べていて、たまたま隣に住むという幸運に恵まれた大変親切なM氏に再会。2年前に夫人を亡くされ、一人娘は結婚してスウェーデンに住む。彼の何時もの好意に甘えて2晩泊めてもらう。フィンランドを去る日に、還暦を迎えず亡くなった夫人のお墓参り、彼の“She was a vary good wife.”に同感と感謝。直ぐ近くにはフィンランドの英雄的建築家アアルトの墓があった。

15年前に50歳で亡くなった上記ボスのお墓参り。墓は故人の遺志でヘルシンキから遙か離れた島の大好きだったサマーハウスの隣にあるという。夫人宅を訪問し、遺影に「御霊前」を。夫人の車で先ず娘さんの家に寄り、私のためにフェルト製のブーツを借りる。快晴、真横からの低い太陽を受けて走ること1時間、海の上を歩くこと30分そこには雪に覆われた花崗岩のお墓。雪を払い蝋燭を灯し、しばし合掌。

＊＊＊＊＊

30年振りのセンチメンタル・ジャーニーのついでに、「近代建築」の黎明期の先達の作品とその後の姿を現場で見たいというささやかな旅も「建築」との邂逅に力を入れ過ぎました。雪と氷の中、観光客とは殆ど会わない旅でした。後半はフィンランドでの故人を含む「人」との旧交を温めることができそれなりに満足感のある、密度の濃い短い27日間でした。

一足お先の甲子園

金田邦彦（76期）

東京桑野会広報部から突然の原稿依頼が有り文才の無い私にとって荷の重い事となかなか筆がはこびませんでした。

私が安積高等学校を卒業したのは今から33年前の昭和38年でした。学校への登校は同期の半数が下駄通学、半数が革靴通学という時代でした。授業は現在の旧本館で受けました。話しによりますと、今は旧本館を使用していないとのこと、安高生として旧本館で授業が受けられたことを誇りに思っています。翌昭和39年には東京オリンピックの開催という、敗戦国日本が復興なった日本の姿を全世界に知らしめた大イベントが有り、開会式の当日、自衛隊機により青空に五輪のマークが鮮やかに描かれたのを鮮明に記憶しています。

早いもので卒業以来30数年が過ぎ、当時の安積の思い出を回想しますと、在籍していた3年間、部活動に明け暮れていた事です。1年はバレーボール部、2年の時に当時9人制が6人制に変わり、身長の無い私は山岳部に入部替え、その間にクラス推薦による応援団立候補、当選、そして1年間の応援団活動と、勉強などとてもとてもの生活でした。特に応援団の活動は、新入生に対する校歌、応援歌の指導、そして野球部の試合応援と安積高校の甲子園初出場の夢の実現に向け、一生懸命応援したことですが、出場の夢はかないませんでした。

あれから30数年間、毎年、春の地方大会、夏の地方大会の結果を新聞で見るのが、安積高校との1つの絆となっていますが、残念ながらいまだ甲子園初出場の夢がかなっていません。

ところが、私ごとで恐縮ですが、母校の甲子園初出場の夢の前に、我が息子、二男が甲子園出場をはたしてしまったのです。

息子は、茨城県土浦市に有る常総学院の野球部に入部、平成6年の第66回選抜大会に6番レフトで出場しました。1回戦、岡山理大高、2回戦、高知商高、3回戦、姫路工業高、4回戦、桑名西高と勝ち進み、決勝戦では智弁和歌山高におしくも敗れ、準優勝の結果でした。まさか、我が息子が甲子園出場をはたすなど夢にも思いませんでした。

母校、安積高校の輝かしい歴史の中の卒業生の諸先輩、後輩の中にも、甲子園出場の夢の実現を心待ちにしている

《地域社会に奉仕して30年》
新時代の物流をクリエイト。
府中運送株式会社
免許番号/65東陸自2貨(1)第1808号
遠藤征志郎（72期）
■本社/〒183 東京都府中市白糸台1-23-10
TEL.0423(65)1476(大代表)
FAX.0423(61)7600
■千葉営業所：千葉県印旛郡印西町木下東2-2-17 〒270-13
TEL.0476(42)8661 FAX.0476(42)8666
■府中配送センター：東京都府中市白糸台1-33-2 〒183
TEL.0423(34)4789 FAX.0423(34)4785
■東京乳業事業所：東京都府中市是政4-8-1 〒183
TEL.0423(69)4612 FAX.0423(69)6693
■三洋事業所：東京都八王子市左入町777-1 〒192
TEL.0426(91)3172 FAX.0426(91)3171
■電報配達事業所：東京都府中市白糸台1-23-10 〒183
TEL.0423(67)1253 FAX.0423(60)2914
■55便事業所：東京都府中市清水丘3-28-1 〒183
TEL.0423(33)0055 FAX.0423(69)9672
■引越サービスセンター：東京都府中市白糸台1-23-10 〒183
TEL.0423(65)8100 FAX.0423(61)7600

人達は大ぜいいることでしょう。そして、母校の校旗が甲子園にひるがえり、校歌が流れる様を想像しただけでも、我が子以上の感激が有ることでしょう。

母校、安積高校の野球部に栄光有ることを心よりお祈り申し上げます。

（㈱ヨシダ宣伝社代表取締役）

介護サービス事業をはじめて

高田勝利（76期）

50才という人生の折返し点に立って、何かもっと社会貢献できる事業はないかと思い、折りしも超高齢化社会の到来が声高く叫ばれるようになったこともあって私は介護サービス事業を始めることを決意しました。もともと会社（丸光産業㈱）で医療・介護用品の製造に携わっており、介護サービス事業から現場の生の声を物づくりに生かそうということもあります。

まず手はじめに、故郷郡山で、94年10月に巡回入浴サービス事業をスタートさせ、95年4月に郡山市の委託を受け、95年10月には厚生省外郭団体のシルバーサービス振興会から念願のシルバーマークを取得しました。

入浴サービスとは、看護婦、オペレーター、ヘルパーの3名がチームを組んで入浴カーで家庭を巡回し、浴槽を持ち込んでお風呂にはいれない寝たきりやからだの不自由なお年寄りを入浴させてあげるサービスです。

介護サービス事業と一口で言っても実行に移すとなると簡単ではありません。入浴サービスは最低1日5～6件は消化しないと採算に乗りませんし、かと言っても冬場の雪のひどい時、特に山間部ではいくら頑張っても、1日2～3件止まりということもあり、又相手の体調によっては中止せざるを得ないことも多く、なかなか計画通りに運べないが実態です。

現在入浴サービスで、シルバーマークを取得している業者は、郡山市では丸光産業㈱1社だけで、福島県内でも3社だけしかありません。何週間、或いは何日かぶりに風呂にはいれて喜んでくれるお年寄りの姿を励みにどこにも負けない当社ならではの、肌理細かいサービスの提供を行っていくつもりです。

日本はやがて65才以上の高齢者が全人口の3分の1に達し、75才以上のお年寄りも2025年には1800万人と今のざっと3倍近くになり、当然寝たきりや、痴呆の発生率も高まってきます。

老いは誰にも必ずやってきます。自分が寝たきりになったら、面倒は配偶者に或いは娘に、嫁にみて貰いたいと期待しても現実は核家族化、女性の社会進出等によって思うにまかせません。80才代のおばあちゃんを60才代の娘、嫁が介護する「老人2階建て現象」という言葉もある程です。

厚生省ではこのようなハイピッチな高齢化の進行を踏まえ「21世紀の福祉ビジョン」として介護の重要性を謳い、施設ケアも在宅ケアにも力を入れており、新ゴールドプラン（老人保険推進10ヵ年計画）ではとくにホームヘルパーの増員、デイサービスの強化を図りつつ、基本路線として「在宅ケア」の充実を目ざしています。これを側面からサポートする意味で厚生省は97年からの公的介護保険の導入をこの通常国会に上程する意向です。介護保険の給付サービスもかなり絞り込まれ、在宅サービスとして、入浴サービスを含むホームヘルプサービス、デイサービス、ショートステイ、訪問看護サービス、福祉用具サービスなどが挙っています。このほか、家事援助サービス、住宅改造サービスなども候補に挙っていますが、この保険給付サービスの提供主体には民間企業が対象に含まれる方向です。

丸光産業㈱としてもこのような流れをうけて郡山市を軸に訪問看護サービス、福祉用具サービス、配食サービス、デイサービスなど、介護サービス事業の総合化を進めていきたいと念願しております。

自分の健康は自分で守っていくことは勿論、自分の老後から目をそらすことなく、これに備えていくことが大切なことは言うまでもありません。東京桑野会諸兄のご健康を心から祈りつつ稿を終ります。

（丸光産業㈱代表取締役）

安積に学んだ脳外科医たち

片山容一（81期）

昨年のことである。東北大学医学部脳神経外科学教室からご招待を頂き、仙台に講義をしに行く機会があった。東北大学の脳神経外科教室は、わが国の脳神経外科研究の頂点に確固たる一大学派を形成している。その教室の助教授という立場にあって、ひときわ輝く俊才に溝井和夫さんという方がおられる。脳血管障害の領域で業績をあげ日本脳神経外科学会の若手リーダーとして注目されている人物である。私はそれまで個人的な面識はなかったが、溝井さんの業績には敬服させられていた。

仙台での講義を終えたとき、その溝井さんが私に不思議なことをいったのである。溝井さんは私の後輩だという

健康づくりのパイオニア
丸光産業株式会社
より良い医療・介護用品づくりとトータルの介護サービス提供をめざします。
［本社］東京都台東区東上野3丁目15番6号 ☎ 03-5818-0303
［工場］福島県郡山市富田町久根下40番地18 ☎ 0249-52-4511
代表取締役 高田勝利(76期)

のだ。判ってみればどうということはないのだが、溝井さんも安積の同窓だったのだ。しかも私とはたった1期違い（82期）だという。大げさでなく私は本当に驚いた。安積を出てから26年、安積とはあまり縁のないところで仕事をしてきた私は、同窓の同業者が日本の各地にいるという意識を完全に喪失していたのだ。そして溝井さんが私と同窓であることを知ってから、そのことに深い誇りを覚えたのだった。

考えてみれば、安積の同窓には医学関係の仕事に就いている方も多い。その中に脳外科を専門とするものがいて当然である。たとえば私の存じ上げている先輩に、郡山にある南東北脳神経外科病院の院長兼理事長の渡辺一夫さん（77期）がいる。渡辺さんも日本脳神経外科学会では有名な存在である。日本脳神経外科学会には渡辺さんの名前を冠した学術奨励賞があるくらいだ。

もうひとり私にとって大切な先輩がいる。私が20年前に脳神経外科学教育の門を叩いたとき、思いがけずそこに安積の先輩がおられたのだ。新進気鋭の講師であった小池祐治先生（68期）である。私にとっては恩師に近い方なので、あえて先生と呼ばせて頂く。先生はすでに日本脳神経外科学会の評議員になっておられ、その頃カイロで行われた国際シンポジウムに招聘されるなど、頭部外傷の領域で国際的にも活躍されていた。

先生はどこでどう調べたのか、私が安積の後輩であることをすでに知っておられ、その日のうちに夕食に誘って下さった。そして専門医の資格を取得するための勉強のこつなど、いろいろな話を聞かせて頂いた。その時のことを今でもよく覚えている。私は虚勢を張っていたが、今思えば内心は心細かったのだろう。先輩というものの温かさに触れて、このときほどそれを有難いと思ったことはなかった。

その後、先生は大学に講師として在職しつつ、若くして横須賀市立病院の脳神経外科部長に就任された。大病院の脳神経外科部長という立場は、私にとっていつかは自分もそうなりたいというまぶしい存在だった。私のほうは14年前に米国に職を得て渡米し、それからは直接ご指導を頂くことはなくなったが、小池先生の存在はいつも精神的な支えになっていたように思う。現在、先生は横須賀市立病院の副院長になっておられるが、今でも部下の医師を率いて緊急処置や開頭手術に辣腕をふるっている。

ただ、渡辺さんや小池先生のような方は私の意識の中では例外に属していた。安積の同窓に何人も同業者がいるかもしれないなどとは想像したこともなかったのである。ちなみに東京の脳外科医たちの中には、大学は別でも高校では同窓だったというひとが意外に多いらしい。そういう話を聞くと羨ましく感じたものだ。そして私には残念ながら無縁なことだと諦めてきた。しかしどうやらそうではないらしい。私が専門医の資格をとった頃には、全国に1000人くらいの脳外科医しかいなかった。しかし現在ではその4倍くらいになっているから、東京桑野会にも仲間がいるのではなかろうか。

安積に学んだ同窓の先輩や後輩の活躍はほんとうにいろいろな領域に及んでいる。東京桑野会会報を送って頂くたびに、皆それぞれが堅実かつ貴重な社会的貢献をしておられる様子を感じとることができる。そしていつも自分がその同窓であることに大きな誇りを感じる。私たちの仕事は地味ではあるが、安積の同窓の中にはこんな仕事をしているものもいるということを紹介させて頂きたくなって筆をとった次第である。

（日本大学医学部教授 脳神経外科学部長）

寒中お見舞い申し上げます

玄葉光一郎（96期）

昨年は阪神・淡路大震災後、地下鉄サリン事件、金融不祥事など、その他多くの暗いニュースが日本中をかけめぐった一年でありました。

私自身にとりましては、震災後の復興や、当選時より取り組んでまいりました国会等の移転問題、そして景気対策の観点から土地税制、さらに農村・農業問題などを柱に活動をさせていただいた一年でありました。

特に連立与党の新三党合意に『二年をめどに移転先を決める』ことなどを盛り込むよう提案して採用されたことや、連立与党三党の建設部会の責任座長として、自・社・さ間で意見の相違が大きかった土地税制について、景気対策を考慮し、緩和の方向で調整案をまとめたことなどが心に残ります。

今年は、景気回復と財政再建、昨年に引き続き国会等移転、そして介護問題、国連改革などを中心に国政活動を展開するつもりです。

一月十六日より一週間、パレスチナ評議会選挙監視のため、衆議院からの正式な派遣で中東を訪問します。先般の野党新進党の党首選では、国連警察軍構想などが打ち上げられましたが、ようやく国際社会の中での日本の行き方が本格的な論争になる気配が出てまいりました。喜ばしいことです。時代の閉塞感を打破するための第一歩は、日本のビジョンをめぐる本格的な論争だ

株式会社 東京シンクサービス

●業務　特許公報の抄録・翻訳、工業技術の指導・調査

●特色　高齢者の雇傭
（全従業員の91％が60才以上、70才以上は54％）

〒101東京都千代田区内神田2—13共同ビル
電　話（03）3254-5805
相談役　鎌田　正二（43期）

と思います。

政策や理念による政界再編も視野に入れれば、日本の進路を決める重要な一年になるものと覚悟して、心新たに努力して参る所存です。

（衆議院議員）

うめくさ問答

滝川　淳（98期）

このスペースは本来なら98期の滝川淳くんからの「ああ我が母校・安積高等学校よ永遠なれ」を掲載する予定でしたが、彼が締切を過ぎても原稿をいっこうに送ってこないため、急遽本人に電話を入れ、催促をしました。それでも送ってこないので、彼への警句（社会とはそんなに甘くないぞ、安高をなめたらあかんぞ、という）という意味でその電話でのやりとりを掲載いたします。ご容赦下さいませ。

→君にだって、安高の思い出があるでしょう。

→そうですね、僕は記念館のトイレを恭しく大使用に使っていたこととか。あれ、体育の授業中に行くには都合がいいんですよね。それとこの前やっぱり都内に住んでる、安高の同級生と話してて思い出したんですけど、チャイと呼ばれているクラスメートの食べ終わった弁当箱の中にこっそり僕たちのチンゲを入れておいて、次の日彼がそのことについて何もいわなかったのがちょっぴり寂しかったこととか。でも僕は友達と言える友達が少なかったから、あとはテストの結果とか。偏差値が高い方がいい、テストの結果がいい方がいい、っていう暗黙の合い言葉みたいなものがあって、いきなり開校百周年記念でＯＢが、安高はバンカラな質実剛健な学校だ、なんていったって実感湧かなかったなあ。安高もいまでは知識詰め込み型の現在の教育に汚染されている普通の進学校だと思いますね。あまり思い出ってないです。それでいいのかもしれないけれど。

→そうは思わないよ、わたしは。

→たとえば、安高卒だったから市役所の職員の間でも、一目置かれているとか、県庁の中でバンカラ愛好会を作って楽しんでいるとか。そう書ける同級生もいるでしょう、きっと。でも僕はわざわざ、東京に出て安高出身者が安高の志を捨てずに、現在の仕事に精進しておりますって、書けなくてね。それこそ嘘だと思うし。ナンセンスですよね。それで書けないでいるんです、どうすればいいでしょうか？（泣きだす―広報部註）

→もっと肩の力抜いてさあ、東京に出てからのことを書いてくれればいい。

→僕は今芸術新聞社という出版社で、『墨』という書の雑誌の編集をしているんですけど、今出版界って傾いているから、ウチみたいな50人ぐらいしか社員のいない会社は、それこそもう大変なんです。だから今も嵐の中です。この会社にはいる前はふるさときゃらばんていう劇団で全国旅回りしてて、その前は日本証券新聞社で編集をしてたり、すべて全然ものにならないの、これからってときになぜかやめるきっかけがあっちからやってきて、それでやめる。また始めからやり直し、だからみんな半人前で。そういういったなかで、安高なんてすぐ忘れちゃう。ほかの安高生は、きっといろいろ目標があって、楽しい高校時代だったかもしれない、でも僕はポヤンとしてるんです、あの頃の記憶って。そう思うと書けないんです…とほほ（また泣きじゃくる。もう手に終えない）

→もういい。私だって忙しいんだ。

（1996年1月末日にて。滝川君の泣き言は聞いてられないので、ここで受話器を置きました。―広報部）

（芸術新聞社『墨』編集部）

世界制覇

渡辺剛司（104期）

前略。平素の疎遠をお詫びし、謹んで新年のお慶びを申し上げます。

会報の原稿をお送りします。若干原稿量が多くなってしまったうえ、乱筆で大変申し訳ございません。

私事としては、もう一年学生をすることになりましたので、桑野会もあと一年、学生料金に甘えさせて頂きたいと思います。何か私に手伝えることがあれば、申しつけ下さい。微力ながら出来る限りのことはしたいと思っております。

「世界制覇」。私が小学生の頃、「一つだけ願いが叶うとしたらどうする？」等の問いに、こう答えることが、私達のクラスで一時流行した。担任の先生に「剛司君は大人になったら何になりたいの」と聞かれ、「世界を制覇したい」とつい答えてしまい、親を呼ばれたこともあった。

そして今、大学生になった私が、その言葉を思い出した時があった。

1994年秋、私は単身、ロシアのウラジオストックからシベリア鉄道に乗りモスクワまで行き、ヨーロッパを大道芸しながら旅をした。ロシア、ポーランド、ドイツ、オーストリア、イタリア、モナコ、スペイン、ポルトガル、フランス、イギリス計10ヶ国、つまりユーラシ

新技術・製品で社会に貢献
工業用ゴム製品の製造
株式会社朝日ラバー
代表取締役社長　伊藤　巌（65期）
面川祐一（71期）
根本雅司（100期）*
佐藤誠幸（101期）*
水野淳也（102期）*
田村浩信（105期）*
本　　社　〒334 埼玉県川口市赤井3丁目3番7号 TEL.048-285-2251(代表) FAX.048-285-2254
大阪営業所　〒536 大阪府大阪市城東区蒲生1丁目12番10号 京橋アドバンス21 205号 TEL.06 930 2521
福島工場*　〒969 01 福島県西白河郡泉崎村大字泉崎字坊頭窪1番地 TEL.0248-53-3491(代表) FAX.0248-53-3493

ア大陸の最東端から最西端までを横断した。

たった一ヶ月の旅であったが、海外経験がほとんどない私にとっては、一日一日が冒険であった。アメリカの3歳児よりも英語力が乏しい私が、それらの国で大道芸をして、人々を楽しませることができたかどうかは、正直なところわからない。

大道芸といっても道具は、各々の国語で「日本の伝統芸能～落語」と書いた紙と、東急ハンズで買った手品のおもちゃと、折紙だけで、あとは、英検4級レベルの英語力と、挨拶程度の各々の国の言葉だけであった。

例えば、イタリアのローマにあるナボーナ広場ではこんな感じであった。午後7時頃、噴水の前に正座をし、「Giapponese falcloristica farsa～RAKUGO」と書いた紙と、裏返した帽子を置き、大きな声で「ボンジョルノ、イタリアーノ！」と叫び、イタリア風の唄を歌いながら折り紙を折り始める。折っている間に人が集まり、折り鶴を完成させた瞬間、オーッという声と共に拍手がわく。その後に、手品をしたり、日本とイタリアのスラング講座を開いたりすると場が盛り上がり、30分もすると、帽子の中がお札でいっぱいになる。

以上のような成功は、大道芸をしたうちの半分もなかった。ドイツでは、一人一人に声をかけないと人が集まらないし、モナコでは人が私をよけて通り過ぎていくし、マドリッドでは、金をねだりにくる子供のせいで大道芸どころではなかったし、ロンドンでは、観客のほとんどが日本人観光客だったりして、自分の納得のいく芸はできなかった。

しかし、旅中、多くの出会いもあった。シベリア鉄道での一週間、朝昼晩の食事をごちそうしてくれたうえ、マリファナのようなものまで吸わせてくれた軍人や、ボルドーで一緒に田舎の中学生がするようなデートをした女子大生は一生忘れないだろう。また、帰国前夜、三菱商事の根本泉先輩（叔父の安積時代の友人というだけで会って下さった）にロンドンでごちそうになり、ここでも安積一家ということを身に染みてしまった。人との触れ合いで、改めて人の優しさを知った。

この旅をしたことで、全世界とは言わないが、今まで未知だった世界をまさに吸収（制覇）したように思えた。これからも、様々な世界を自分の中で制覇し、自己を高めていこうと思う。

以上。

（明治大学 商学部 落語研究会）

ビワハヤヒデ回想録

瞳の中のビワハヤヒデ

赤沼雅彦（86期）

馬なんかより、龍（たつ）（実家で飼っていた犬の愛称）の方がよっぽど可愛い。そう思っていたボクが、今ではビワハヤヒデのマーク入りジッポで煙草に火をつけ、ビワハヤヒデのビデオを繰り返し見て満足し、彼の産駒のデビューを心待ちしている。

ビワハヤヒデ。芦毛のサラブレッド。競争馬として、彼ほど信頼のできる馬はいなかった。

1990年3月10日生まれ、誕生の地は福島。戦績は16戦10勝2着5回。残りの一戦は、引退レースとなった秋の天皇賞5着。連対率は9割以上。つまり、出走すれば必ず馬券になった（払い戻しができる）。彼をどこまで信頼するかが馬券の決め手になる。彼が出走するレースは、必ず彼を中心に馬券を買っていた。競馬をはじめてから今日まで、そんな馬はビワハヤヒデ唯一頭だけである。

彼はデビュー後レースを重ねるたびに、ヤンチャとか、G（ゴール）前の競り合いに弱いとか、血統的に長距離は不向きとか、様々なマイナス評価を受けていたが、ボクは彼の何かに魅かれていた。

ボクと同郷だから。それもある。ボクと同じくでっかい頭をしているから。それもある。強いサラブレッドだから。それもある。たぶん、それらの理由全部があてはまっていたと思う。はじめは小さな結晶だったビワハヤヒデへの共感が、少しずつ心に積み重なって、ついには、彼と同化していった。

ビワハヤヒデは、ボクに競馬への招待状を送ってくれた。ボクは、その招待状を無条件に受け取り、彼は、引退するまで、競馬というゲームをボクに教えてくれた。そんな、2年あまりの月日だった。

ビワハヤヒデがいて、ボクがいた。

彼とボクが実際に顔を会わせたのは一度だけだった。1994年10月30日、東京競馬場のパドック。舞台は秋の天皇賞。彼の引退レースであった。そして、初の敗北レース…。

彼とボクにとって、最初で最後の出会いになった。悠々とパドックを廻るビワハヤヒデの視線は、確かにボクの瞳を捉えていた。

心なしか、さびしそうに感じた。はじめての出会いなのに、別れを告げているような視線だった。

—さようなら—

馬券なんて、どうでもよかった…。

ビワハヤヒデは、このレースで5着に沈みターフを後（あと）にする。レース後屈腱炎が判明し、引退する。もう二度と、レースで彼をみることはない。

（映像ディレクター）

電気設備設計施工
株式会社 渡辺電務社
【本 社】 〒135 東京都江東区三好1-1-2 TEL.03-3641-0136（代表）
取締役社長 渡辺豊定（58期）（旧姓 沢村）　取締役顧問 土屋七郎（57期）

二つの大きな疑問

－終戦50年に当り戦中派の感概－

吉田弘俊（52期）

1．太平洋正面作戦において、わが海軍航空部隊のみが（陸軍航空部隊の協力がなく）戦わなければならなかったのは何故か

戦時中はもとより、戦後の多くの史書、戦史にこの点を指摘したものは殆どなく、論点を「国力の差」ということではぐらかしているものもある。海軍側としては、あるいは「武士の情」、「武士は相身互い」とかいうことで、陸軍航空部隊とその作戦上層部への遠慮からか、右の大きな疑問に対する反省や指弾が少ないような気がする。

丁度半世紀前の終戦と、太平洋戦争中の諸々の実相を思い出すに苦渋に満ちたものであるが、特に太平洋正面作戦を主とするさきの大戦にあって、わが国の航空戦力の半ばを占め、海軍側とほぼ等しい予算で整備された陸軍航空部隊が、主戦争相手の米軍の陸軍航空部隊に比べあまりに無力であったことと、それに対する戦争指導層の無策（結果的にみて）であったことへの無念の思いは限りないほどである。

（注　第二次大戦中までは、日米とも航空部隊は陸軍と海軍－米では海兵隊を含む－に所属し、独・伊・英・豪のように空軍として独立していなかった。）

一方、第一線での経験による実感として、米軍側では陸軍航空部隊のP－38、P－39戦闘機、B－17、B－24、B－25爆撃機、海兵隊のF4U戦闘機等が、米海軍機動部隊と緊密に協力し、敵ながら手強いものがあった。

私の体験でも、昭和18年11月、第二艦隊（司令長官、栗田健男中将）の重巡主体の戦力（愛宕以下8隻の巡洋艦と4隻の駆逐艦）をもって、トラック基地を発進し、ハルゼー艦隊に挑戦したが、ラバウルに到着の11月5日早朝に、米側の戦爆連合の航空部隊に機先を制された。海陸軍協同の大編隊（空母2隻の艦載機150機とB－25陸軍双発爆撃機50機）の攻撃は1時間30分にわたり、わが方は撃沈は免れたものの各艦の被害は少なくなく、結局トラックに引き揚げざるを得なかった。このラバウル海空戦で、わが方も、強力なラバウル航空隊の零戦60機の邀撃と、各艦の対空射撃で50機を撃墜（確認）して健闘したが、ラバウルに在った陸軍航空部隊の協力は全くなかった。

それにしても、太平洋戦争で、わが国の国運を賭して、陸海軍が共に戦った①ガダルカナル攻防戦と、②「あ」号作戦のマリアナ方面作戦の二大戦機において、海軍側の強い要請があったにも拘らず、陸軍機が一機も参加しなかったのは何故か。

第一の疑問は、さきの大戦での太平洋正面の作戦は、端的にいって正に「空の戦い」であったことは誰でも認めるところで、私達も前線にあって、

「何故海軍航空に資材と人材を重点的に充実しないのか」

と切歯扼腕していたが、何故にこの願いが達成されなかったのだろうか。

それが国の命運よりも陸海軍の面子や縄張りにこだわっていたことによるとなれば、戦争指導上重大な背信であろう。果たして、戦後わかったことながら、例えば昭和16年から20年までの間、航空機の機体生産機数（航空工業界資料より）は、陸軍機3万410機、海軍機3万2120機ということで、この点わが国首脳の戦争指導について甚だ理解に苦しむところである。

第二の疑問は、単に航空関係の資材割り当ての問題ばかりでなく、海軍の首脳（軍令部・聯合艦隊司令部など）は、陸軍側に対し、陸軍航空部隊の派遣、協力について、どれほど真剣に強力な要望を行ったのだろうか。確かに、ガダルカナル撤退後や、マリアナ作戦前や、トラック基地壊滅後などに、度々「陸海軍中央協定」なるものの折衝が行われたことは、戦後に知るところであるが、結局陸軍航空部隊の洋上作戦への不向きその他の口実により陸軍側に押し切られ、結果としてその協力は得られなかったのは何故か。この辺の事情を今更詮索しても致し方がないことながら、戦局を大いに左右した大きな問題なので、やはり明らかにしてほしいと思う。

第三の疑問は、陸軍航空部隊の当事者はそれなりに懸命であったことは認めるが、陸軍機の多くは、大陸での地上部隊に協力という建軍の方針から、航続力は小さく陸地の上空しか飛べず、洋上航法・夜間航法の能力が不足していて、その洋上作戦力が著しく劣っていたことは開戦前から周知のことであった。このように陸軍の航空軍備には近代戦上致命的な欠陥があったので、海軍航空部隊は、太平洋正面では、単独で、米海陸航空部隊及び英豪航空部隊と戦わざるを得なかった。

この自明の理にも等しい軍事上の分析等について、仮想敵国（主として米国・陸軍航空兵力を含めて）の航空部隊との対比を合わせて、開戦前にどれほど合理的かつ冷徹に行われたのであろうか。

これに対し、米陸軍航空部隊の太平洋戦線での活躍は敵ながら見事であった。特に、四発爆撃機B－17、双発爆撃機B－24等は、わが海軍の航空・艦船部隊にとっても大敵で、昭和18年4月18日にブイン上空で山本長官機を撃墜

兼営のレストラン「ヤムヤム」TEL3769-1155
（JR田町駅から徒歩7分の本社構内。駐車無料、年中無休）は、「高級で廉価」と好評です。
なお、会員のご家族やクラス会などには、右の『直通電話』にご連絡下されば、予約を承ります。

●収容能力15万トンの業界大手
五十嵐冷蔵株式会社
（冷蔵・冷凍食品・低温運輸の総合エンタープライズ）
〒108 東京都港区芝浦2-10-5
TEL 03(3451)1111（大代表）
03(3451)0112（直　通）
FAX 03(3451)1114

東京桑野会会員
吉田弘俊（第52期）

したのも陸軍機のP－38双胴戦闘機であった。

また、開戦当初の戦勝気分に浸っていた一年前の奇しくも同じ4月18日（土）の正午過ぎに、東京等の上空に現れ爆撃を加えたジェームス・ドウリットル陸軍中佐の率いたB－25爆撃機16機も、千百キロの遠距離から空母ホーネットより発進の陸軍機であった。

さらに、本土の殆どの都市等に壊滅的な打撃を与えた戦略爆撃機B－29が陸軍機であったことは周知のとおりである。

このように米陸軍航空部隊がよく海軍航空部隊に緊密に協力したことを述べたのは、一方においてわが陸軍の航空部隊が、前述のわが国の命運を決した二大戦機をはじめ大事な戦局で参加しなかったことに対して公正に究明したいからに外ならず、このことは、軍事戦略としてはもとより、国家戦略の見地からしても、最も重要なことと考えるからである。

要するに、国力に著しい懸隔のあったわが国が、しかも海軍航空部隊単独で連合国の海陸航空部隊に勝てるわけがないものの、ほぼ同様の予算で形成された陸軍航空部隊が、せめて海軍とほぼ同様の活躍をしておれば、軍事面に限っていえば、太平洋戦争の様相は、大分変わっていたであろう。何事も、国力の差や科学開発力の格差などの理由をもって敗戦の分析をする風潮とは別に、検討すべきことは少なくないことを指摘したい次第である。

歴史的にみて、どこの国もネービーとアーミーは仲が余り良くないが、また海軍側にも戦略的な失敗はあったものの、日本の陸海軍はもっと国家的戦略に立って互いに協力的であってほしかったというのが筆者の本心で、本稿は日本陸軍航空部隊の非力を糾弾するものでないことを理解してほしい。

2.「日本は無条件降伏はしていない」という自明の事実に多くの人が関心が少ないのは何故か

私は復員後、偶、第二復員省から外務省の終戦連絡中央事務局（CLQ）へ出向を命ぜられ、政治部軍事第二課長柴勝男大佐（兵50期）、同課長補佐宮崎勇中佐（兵58期）のもとで、連絡官（Liai-son officer）として、終戦処理に関して連合軍総司令部（GHQ）との折衝のお手伝いをさせて頂いた。

私は国際法の講義を兵学校で受けたような気がするが、正直なところ国際法などには全く素人であったが、ポツダム宣言には関心が深く、また外務省には国際法・条約等の専門家が多かったので、種々質問等を行った記憶がある。

ところで、このテーマに関して、殊更申すまでもなく、日本の「敗戦の原点」は、昭和二十年八月、連合国に対し、ポツダム宣言を受諾したことにある。

そして結論をいうと、ポツダム宣言はもとより日本に対し、無条件降伏を要求しなかったし、一方それを受諾したわが国は、当然のこととして連合国に対し無条件降伏をしたわけでない。つまり、ポツダム宣言を受け入れて、わが国の主権を維持しつつ降伏したことは明確である。

この辺の詳細な事情については、真の愛国者で碩学の江藤淳教授の研究に詳しいので、その多くの著書などを是非お読みになって頂きたい。

しかるに、世に一流と自認しているジャーナリスト達の中にも、日本は連合国に対して無条件降伏をしたなどと意見を述べ、一般読者などもそれをあまり詮索しようともしないで、受けとめているようである。このような意見や説をなす人は、恐らくポツダム宣言を一言、一句詳しく読んでいないことによるものと推察される。

即ち、ポツダム宣言の全項目を調べるとその中で、「unconditional surren-der（無条件降伏）」なる用語が使われているのは、最終の第13項だけで、しかもただ一ヵ所のみである。肝心なところなので、その用語をあげてみると次のとおりである。

それは、「unconditional surrender of all japanese armed forces（全日本国軍隊の無条件降伏）」という文言において用いられる一ヵ所のみである。即ち日本がポツダム宣言を受諾した結果、「無条件降伏」をしたのは「全日本国軍隊」であって、「日本国」でないことは、自明である。

次に、そもそもポツダム宣言は、降伏の条件を提示した文書で、一旦受諾されれば、国際協定をなすものである。つまり、同宣言は、敗戦国の日本のみならず、戦勝側の連合国をも拘束する双務的な協定である。

従って、日本は、占領中といえどもこの協定の相手国に対して、降伏条件を保留し得ていたのである。そしてこれは国際上正当な常識である。

要するに、ここで申し上げたいことは、「敗戦の原点」たるポツダム宣言が、仮に日本が国家として無条件降伏であったとするならば、例えば、不当な北方領土（四島）占拠の返還要求は出来ないこととなるわけで、そのようなことが外交上絶対あり得ないのは、「日本が無条件降伏をしていない」からに外ならない。

戦争に破れたからといって歴史的な事実を曲げて、自らを卑下するような風潮はなくしたいものである。

（文中の傍点は筆者記注）

（平成七年八月）

NTTエレクトロニクステクノロジー（株）
（株）カージオペーシングリサーチ・ラボラトリー
営業推進本部長 常務取締役
大和田 允彦（71期）
〒180 東京都武蔵野市吉祥寺本町18 12
TEL.0422-20-1081
FAX.0422-20 1263
自宅 〒243-02 神奈川県厚木市飯山2116-88
古松台13-2
TEL.0462 41-9618

南福音診療所
所長
石黒 早苗（71期）
〒364 埼玉県北本市北本宿161 4
TEL.0485-91-7191
FAX.0485-91-9668
自宅 〒363 埼玉県桶川市上日出台1284 12
TEL.048 786-1450

東京農工大学・農学部
教授
塩谷 哲夫（71期）
〒183 東京都府中市幸町3-5-8
TEL.0423-67-5800
FAX.0423-67-5801
自宅 〒164 東京都中野区上高田4 8 1 605
TEL.03-3228-9976

編集後記

■安積の日下部先生に前回17号のスケッチをお願いした時は「ああ時間がなさすぎる」ほどの無理な注文の仕方でした。今回はそのお詫びも兼ねて少し早めに事の次第を再びということになりお寄せいただきました作品は母校界隈の「思索の森」の墨絵でした。学生の頃に身にしみたあの桑野の風情が高下駄の音とともに蘇ってくるようです。近々機会あり次第今度こそ日下部先生にお会いして感謝の意を申しのべたいと思っております。（74期　高松　豊）

■紙面のスタイルを15号以前に戻して、No.18号をお送りします。会報作成経費の削減が主な理由ですが、会員への郵送部数約 3,500部の郵便代も大変なもので、会報の重さを軽くするねらいもありました。今回広告についても、不景気の折、企業広告が集まりにくく、名刺広告でカバーすることができました。71期の増子邦雄氏が同期の方を大勢集めて下さり大変感謝しております。

今回の編集作業は近頃皆様多忙でなかなか集まりにくく、電話 FAXのやりとり、さらに紙面スタイルの変更もあって士気も落ちぎみで、18号は休刊かの意見もありましたが、どうにか発行に間に合った感じです。会員の皆様へ！とにかく原稿と広告を下さい!!

（78期　櫻井淳）

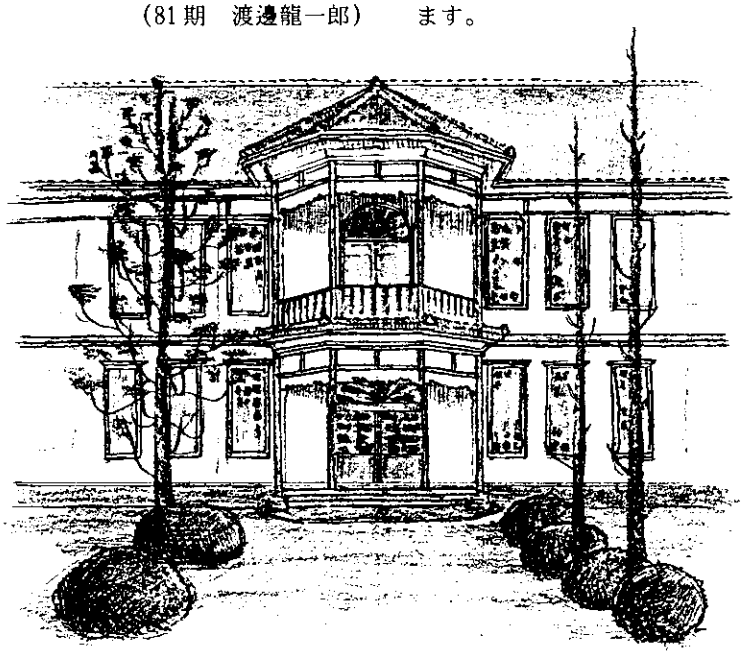
■どうにかこうにかといった感でNO.18号をお送りします。これもひとえに原稿や広告を頂いた皆様のおかげと厚く御礼申し上げます。さて戦後50年の追憶も重大事件や社会悪の噴出で吹き飛んでしまい、改めて新しい価値観づくりを始めた矢先に、住専だ！大蔵不正だ！薬害エイズだ！etc.とまだまだ戦後50年総てのウミが出切っていないと感じました。何があってもおかしくない今の日本、何でもありの日本。もうこの際だから総てのウミが出切って欲しい。そしてその後に21世紀が、私たちにとっても、子孫にとっても豊かで幸福な社会になることを願うのみです。

（81期　渡邊龍一郎）

事務局便り

■会報の発送は、会員各位の住所動向に大きく左右されてしまいます。住所が変わっていると、せっかくの会報も戻ってきてしまうので、住所移動の際は事務局まで、ご一報下さるようお願い致します。

■総会の出欠ハガキを同封していますが、ハガキには氏名、住所、電話番号、卒業年、期、勤務先と電話番号、役職等を明記して下さい。そして連絡もれもあるかと思われますので、お誘い合わせのうえ、多数のご出席をお願い致します。



ディスカバリー96年ラインナップ新登場

V8i/Tdi S
¥2,990,000
V8i/Tdi County ¥3,590,000 V8i ES ¥4,290,000

LAND-ROVER
DISCOVERY

※上記価格は希望小売価格です。消費税及びその他の税金、保険料、登録料、付属品（フロアマット等）の費用は別途申し受けます。詳しくは下記の販売店にお問い合わせください。

ROVER JAPAN
〒153東京都目黒区青葉台4-7-1

ローバー中野支店
〒165 東京都中野区江原町3-18-1　TEL.03-3950-1001　支店長　清治和昭（66期）